

# 絶対に錆びさせない 鉄部塗装

実用知識

## 6

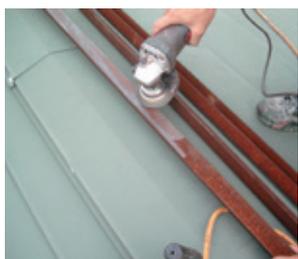
編集部

協力：ゆうき装業

塗料選定よりも大切なのが下地処理だ。素地に錆が少しでも残っていたら塗装の意味がない。以下、トタン屋根塗替えを例に説明する。まず古い釘があれば撤去し、すぐ隣に新しい釘を打つ。そこにシーリングを充填して防水する。次に高圧洗浄で埃や鳥の糞などの汚れを落とす。素地がきれいになると塗装の密着性が増す。次がケレンだ。ワイヤーカブプなど利用したサンダーで錆を除去する。屋根の表面はマジックロンという硬いたわし状の道具で全面に傷をつけ、同時に錆を除去する。ケレン後は埃や錆カスが粉塵となる。それらをブロワーで飛ばす。粉塵を水で洗うと水分が残る錆のようになるので厳禁だ。

ここから塗装だ。下塗り（錆止め）+上塗り2回が基本だ。下塗り（錆止め）塗料は、主に下地との密着を図るために用いる。現在ではウレタンなしシリコン樹脂塗料が主流だ。昨今は環境配慮から防食性の高い重金属の顔料が使えないので、下塗り塗料は空気や水を遮断するための密着性がより重要だ。その点でいうとウレタン・エポキシ樹脂塗料のなかでも2液形の評価が高い。特に2液エポキシ樹脂塗料は密着性に優れている。ただし、エポキシ樹脂は紫外線に弱いので7日以内に上塗りを施す必要があり、雨にも弱い。ウレタン樹脂塗料であれば10

日は上塗りまで開けられる。また、耐候性もエポキシよりよい。製品の例としては、専用シンナーで希釈する弱溶剤2液形ウレタン樹脂塗料「RMプライマー」（水谷ペイント）の評判がよい。上塗り塗料は水・空気を遮断するという点から厚塗りできるものの評判がよい。たとえば2液性のシリコン樹脂塗料「アルティモ」（水谷ペイント）である。アルティモは固形分の多いハイソリッド型の塗料なので厚く塗れる。通常が上塗り1回の仕様だが、あえて2度塗る塗装店もある。また弱溶剤型ウレタン樹脂塗料「カナエウレタントップ」（カナエ塗料）も厚く塗ることができ、評判がよい材料である。



錆止めをケレンしている様子。  
鉄部の塗装はケレンが命



「アルティモ」で仕上げ、  
2年経過した屋根。光沢を保ちよい状態

# 長もちする外部用の 木材塗料は？

実用知識

## 5

編集部

協力：今井塗装、滝川塗装店

外部における木の塗装は、デザイナーが好む木肌を生かしたものはまずもない。3年がよいところである。この事実を前提に、ここでは塗りつぶしの塗装で、長もちさせるための工夫について解説する。

### グラファイトペイント

木の塗装のもちが悪いのは、木が動くためだ。乾燥すると塗布面からは水分が抜けにくいため塗布面側が凹むように反り、水蒸気を含むとまた戻ろうとする、この木の動きに塗膜が追従できず、木と塗膜の間に隙間ができる。そこから水が入れば塗膜は内側から剥がされる。したがって、木の動きに追従しては木の動きに追

従できる柔らかさをもった塗料が必要になる。塗料に含まれる顔料は塗料の柔らかさに大きく影響する。つまり、顔料も柔らかくなければいけない。この条件に適しているのが、グラファイト塗料だ。この塗料は顔料の黒鉛が鱗状に折り重なっているため、木の動きに追従しやすい。金属下地に用いられることが多い塗料だが、木部に使用しても効果が高い。群馬の今井塗装の実績では破風に使用して8年経過しているものもある。ただしこの塗料は色が銀ねずみ色に限定される。

### IP水性メタルコート

ほかの方法で成果を上げている塗装店もある。三重の滝川塗装は、木部を塗り替える際に、塗継ぎ部のみ塗膜が残っていることに気づき、密着性のよい水性塗料を厚めに塗る方法で成果を上げている。水性塗料を用いているのは塗膜の柔軟性と通気性を重視しているためだ。通常は木部用ファイラーを塗った上に水性アクリル系の「IP水性メタルコート」（インターナショナルペイント）で仕上げていく。同塗料は金属塗装用に開発されたもので、どろりとしていて密着性が高いのが特徴である。滝川塗装は以前は同じIPシリーズのIP木部用ファイラーを使用していたが「F☆☆☆☆」への切り替え時に粘度が低くなったため「IP水性メタルコート」に切り替えた。



グラファイト塗装の表情。銀ねずみ色（写真提供 今井塗装）